



『アントワープ-ジュネーブ1』 紙に鉛筆 2014年 個人像
「対称性/非対称性」シリーズの最新作。矛盾するもの同士の同時存在の可能性を探る作品。手前の左右対称のアントワープ大聖堂と奥の左右非対称のジュネーブの風景とがつながって描かれている。

私は表現する「世界」のルールを考え、それを素材となる風景などに当て嵌めてみる、という方法を用いて作品を制作しています。ルールの例は「一番大切なものが欠落したらどうなるか?」(Without You シリーズ)、「唯一であるはずの存在が2つになってしまったら?」(Perfect World シリーズ)などです。描く素材は旅先のフリーマーケットなどで購入した戦前の絵葉書や異国の家族のアルバムに写っている風景や人物などをイメージに基づいて1つの風景に合成して描きます。そ

の際私自身の創作は控え、画面全体に一見何も起きていないかのような自然な風景に見えるために想像力と技術を用いています。

この方法を見つける以前は、現在の私の制作方法とは正反対に自己の内面を表現するよ

うな作品を描いていました。表現する内容はすべて自己の中にあるはずで、それを表出することが制作であると信じていたのです。さらに私自身の心の内面にある不安、恐怖、違和感などの感覚は全ての人に共通するはずであり、鑑賞者は私の作品を通じて私の内面を観ることで鑑賞者自身の内面と重ね合わせることで鑑賞者自身の内面と重ね合わせるのではないだろうか、と予定調和的な夢を見ていました。共感、共鳴を作品理解に結びつけて考えていたのです。

そのような考え方に基づいて約10年間、様々な方法を用ながら作品を制作し続けましたが、このまま続けることに意味があるのだろうかと自問自答した末に、作品の内容と私自身の身を置く環境とをともに見直すべきなのかも知れないと思いました。

とてもつらいことでしたが、全てを信じてきた私は全てを疑ってみる必要

があったのです。

ここからは作品の内容面に関して述べます。

まず大前提であり、ずっとこだわってきた「自己」を思考や制作の中から可能な限り消し去り、消去の果てに残ったものを私の制作であるとし、そこに何があるのかを見届ける。それに納得できなければもはや作品を世の中に生み出す資格はない。それ程の覚悟で挑みました。今から思うと、それは最後の挑戦だったと言えるでしょう。私はこの考え方を制作にもそのまま当て嵌めていました。例えば有名な映画のワンシーンや西洋絵画の画面から一番重要な人物などを消去し、生じた空白はなるべく自然に見えるように埋めるというように。色彩はそれ自体が表現となりうるので、当初は最小限の色彩すなわち白と黒のみを用いていました。

この方法を用いた最初の作品が完成し、「Without You シリーズ」と名付けた時、私にはその背後に多くの別の方法もずらりと並んでいるのが垣間見え、世界を解釈し、鑑賞者を新しい認識へと導くことこそが私の役目だと悟りました。

私のアトライフはこの時始まったのだと思います。



小川 信治
画家

1959年山口県生まれ。三重大学教育学部美術科卒業。主な個展は「干渉する世界」国立国際美術館(大阪)、「Perverse Realism」Bunkier Sztuki(クラクフ、ポーランド)、Art Basel Hong Kong(香港)など。国内の他、バーゼル、ドバイ、クラクフ、香港などで展覧会を多数開催。